

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 ダスティッド フェラティ

難民キャンプは、多様な理由で避難を強いられた人に安全を提供する機能を持つ。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によって提示される三つの選択肢である本国への帰還、難民キャンプのある地域への統合、それら以外の国への再定住のいずれかが実現するまでの一時的な場のはずだったが、実際には長期化し、平均滞在年数は17年である。しかし難民キャンプに対する認識の切り替えは、難民、受け入れ国、UNHCR いずれの主体にとっても困難である。難民キャンプの建造や維持管理を職務とする UNHCR にとって恒久的なキャンプ建設は費用がかかり、受け入れ国は難民の地域統合を意味するものとなるからだ。

さらに現在難民数は増加を続け、6,880 万人、60 カ国 1,000 箇所の難民キャンプに住んでおり、それらは時間的にも地理的にも多様な状況下にある。しかし、UNHCR のガイドラインに象徴的なように現状の建設システムはあまりに一般化されており、難民の文化やライフスタイルを全く配慮していないという問題がある。また、難民には就労、不動産の所有、キャンプ外への外出などが基本的に禁止されている。

既往研究の蓄積も進んでいるが、ほとんどは難民キャンプを失敗であると評価している。しかしその失敗を引き起こしたと考えられる、建造環境と社会経済要因の相関関係について触れている研究はほぼ存在しない。

こうした状況のもと、本研究は、これらの難民キャンプがなぜ失敗するのか、また難民キャンプのガイドラインはどのようにあるべきか、という点に答えるものである。対象は、難民が最も多く生まれているエリアに位置し、現状では平穏で世界最大規模であるケニア北部のカクマ難民キャンプを主としており、ギリシャの難民キャンプ、ナイロビとウガンダでの都市難民についても調査を行った。

第2章では、哲学なども含むあらゆる分野の既往研究と、UNHCRの歴史的な背景や関連法をレビューし、難民をめぐる状況は常に変化するので、対応する制度は柔軟に対応する必要があるが、既述のように長期化難民キャンプという実態に制度が対応できていないことを明らかにした。

第3章はカクマ難民キャンプの立地しているケニア、郡、ホストコミュニティの文化を整理したのち、カクマ難民キャンプが通常の居住地であることを明らかにした。当初の一時的なキャンプとしての想定が、如何に変容したのか、現状と背景を明らかにするために、形成時期は同じだが出身国が異なるブロック、形成時期は異なるが出身国が同じブロックをそれぞれ抽出して、詳細な現地調査と120世帯を対象としたロングインタビューを行った。

第4章は、主に物理的環境の調査であり、結論の一つは家屋の境界線に使われる材料である。具体的には泥塀が南スーダン出身、鉄シートはソマリア出身に分かれることを明らかにした。

続く第5章では、世帯の経済的状況の調査によって人道支援、就労、血縁者からの送金など多様な収入源を持つことを明らかにしたうえで、第4章で述べた家屋の境界線の材料の違いは財力にあり、泥塀が鉄シートに変わることを明らかにした。カクマ難民キャンプ内の市場調査によって、商店主となったエチオピアとソマリア難民は、いずれもコミュニティから起業に必要な資金を得ているが、南スーダン難民は自力であったことがわかった。

以上を受けて第6章では、部族間の比較を行い、ソマリア人は南スーダン人よりも、相互依存が強いこと、カクマ以外の同国人からの支援を受けていること、難民から第三国へ再定住した人が多いことを明らかにした。

最後に、難民キャンプは非場所 (Non Place) として扱われるべきではないし、通常の居住地とあまりに異なる方法で扱われるべきでもないとして、強いコミュニティの絆すなわち社会経済要因が建造環境の違いやホストコミュニティとの関係にも大きな影響を与えている実態をふまえたうえで、難民キャンプの空間計画を再構築する必要があると結論づけた。

難民キャンプの建造環境に関する研究は極めて希少で、非常に詳細に実態を調査し、膨大な調査結果を得て、結論に至っている。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。